

イチジクは無花果と書くが花がある

小 関 栄

イチジクは珍しい木だ。鹿の角のようにニョキニョキ伸びる枝、葉っぱは春先に新芽が出てどんどん大きくなり桑の葉よりも厚くて大きな三、五裂の手の形。葉や枝を切ると白い乳状の汁が迸り出る。しかも花も咲かないのに実がなるので無花果と書く。処がその実が花である。



六月初めの梅雨時に、枝先の葉の付け根に緑色の小豆よりも小さな卵形の蕾が出来ると、これが花囊で、この中に雄蕊雌蕊ぎっしり包まれた花の塊になっている。これが夏中に次第に大きくなり、開花しないで初秋に赤みを帯びて実となる。無花果とは全くの当て字。

イチジクの呼び名は漢名の映日果(yingriguo)→インジグオ→イチジクオに訛って変化したのが語源らしい。また、原産地の昔のペルシャ語の発音からと云う説もあり、さらに一果ずつ熟することで一熟(イチジク)から名付けられたともいう。日本には江戸時代の初め鎖国の時にこっそりと長崎に渡来した。日本古来のイヌビワやヤマグワも同類でイチジクと云う人もいる。

(上の写真は我が家の庭の無花果(イチジク)、実はもう熟して食べられる。9/20撮影)

イチジクの花囊熟れて 裂けにけり 淡水

右のポスターのように第七回目の国際尊徳思想学会が明治大学で開催された。日中韓三か国で総勢約二百人(内、中国約五十名、韓国三名)が参加で、前回の北京の精華大学での時とほぼ同様の規模、益々日中友好関係を深めることが出来た。今回のテーマは「地域活成と報徳」で、今話題の地方創生に因んで、地方の活性化を図るのに報徳の

普及によって進めようというものだった。研究者の学術的な発表が多かったが、小田原や御殿場の報徳社からは報徳活動の実例が披露された。日本中国の双方から、儒教の流れを汲む報徳思想を東アジア文明圏まで広げようという同意見が出て有意義だった。学園花の村からは、報徳に熱心な伊藤公博氏と小生の二名が参加した。

(小関栄 記)

国際二宮尊徳思想学会 に参加して

